
藍の世界

優月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍の世界

【著者名】

ZZコード

N1707S

【作者名】

優月

【あらすじ】

藍色の瞳は禁忌の色、異形の存在。

そう言われ、腫れ物にさわるようになつた紫苑。自分でも自分の存在を否定せざるをえなかつた。そんなとき出会つた存在。

藍色の瞳に違つ世界が見えた瞬間だった。

プロローグ（前書き）

否定されつづけた存在に見えたひとすじの光。
たつたひとつ、その存在さえいれば、生きていた。
自分を否定しない、ありのままをみてくれる存在。
いつか迎えにいくまで、その存在を思い、生きてゆくと決めた。
この藍色の瞳をきれいといつてくれた、かの君を。

プロローグ

なんて不思議な世界だらう。

力あるものが迫害され、うとまれる。

自分など存在してはいけないと思わざるをえなかつた。

そんなときに出会つた存在に、藍色の瞳に映る世界は一変した。
たつたひとりの存在、唯一の存在。だからこそ愛しく、求めずには
いられない。

「どうしたの？ 怪我してるの？」

不思議そつに顔を覗き込んできた少女に、しゃがみこみ顔を伏せて
いた少年はびっくりしていた。

なんのくつたまもなく、笑顔をむけられたことがはじめてでびつ反
応していいのか

わからなかつた。

「わあ、きれいな目だね。外人さんかなあ。

気分悪いならいつしょにつかに帰るつ？」

かけられた言葉にまた呆然としてしまつ。そして思わず問つて いた。

「気持ち悪いの、 、 、 ？」

しほりだすように紡がれた言葉の意味がわからないうつよつて、

心底不思議そうな顔で少女は笑つた。

「どうして気持ち悪いの？私の大好きな色なのに。」

「きれいな色！私の田もあなたと同じ色がよかつたわ。」

なんの打算もなく、心底そう思つて いるといわんばかりのその顔に、

自分の心が変わつていいくのがわかつた。

「 、 、 、 ありがと。」

名の意味

「ふざけないでよっ！… いい子ぶつて何様のつもり！？」

背中にはしる激痛に、春陽^{はるひ}は自分が屋上のフェンスにたたきつけられたことを知る。

田の前にいるのは自分と同じクラスの少女達。

理由は簡単、クラスでいじめにあつていた子をかばったため、今度はその標的が自分になつただけのことだつた。

「人の痛みがわかる子になつてほしい。」

「暖かい、春の陽射しのよう」に、人をあたたかく包み込む人になりなさい。」

そう願いを込めてつけられた自分の名の「」とく、春陽はその子をかばつた。

が、現実はそんなに甘くはない。

それでも、やつぱり自分は間違つていないと春陽は前を見据えた。

自分をにらみつけてくる数人の女の子を前に、春陽は言った。

「自分達のしていることの恥ずかしさがわからない？」

自分がもし、逆の立場だつたらどうするの？　その痛みもわからぬい？」

おびえることなく、凛としたその瞳の強さに少女達はひるむも、リーダーであるつ

一人の少女が気に食わないとばかりに春陽の胸倉を掴む。

その拍子に春陽の首にかかっていた、指輪を通したネックレスがちぎれて落ちた。

「あら？ 何かしら」れ？　大事なものようね。」

その瞬間顔色の変わった春陽の様子に、いいものを見つけたといわんばかりに

その指輪を持ち意地悪く少女は笑つた。

「はいっくばつて、許しを請いなさい。そしたら返してあげる。」

満足げにいう少女に、春陽は一瞬瞳がゆれたが、ゆっくり首を振つた。

「あなたはどんどん自分を貶めてる。かわいそうになるわ。

そんなことして楽しい？ いつか、その黒い感情に飲み込まれるわよ。」

その言葉にカツとした少女はその指輪を思わずフォンスむこうへ投げていた。

「わあみるーーー！」

そうふりかえり春陽をみるも、そこに春陽はいなかつた。

そして自分の後ろへ視線をやる、少女達の口から悲鳴が響いた。
次の瞬間少女がみたのはフォンスを越え、投げられた指輪に手をのばす春陽の姿だった。

「こ」は4階、フォンスの向こうは当然何もない。

呼ぶ声

その瞬間、春陽は自分でもわからない衝動に突き動かされていた。

気がついたら指輪に手を伸ばしてフェンスをこえていた。

” いつか、いつかまた会おうね、僕はそのときまでにひとつ強くなる。

君を守れるぐらいきっと強くなっているから。

「 これはその約束の証。

必ずむかえに行くからね。

それまで、待つてて、春陽。

”

脳裏に懐かしい、声が響く。

藍色の、美しい瞳の少年が笑っていた。

どこかさびしく、はかない表情をしていた彼が、初めて自分に見せてくれた笑顔は、

春陽の心に忘れぬ思いを残した。

幼い想い、そして幼い約束。

それでも、少年の瞳と同じ藍色の石を埋め込んであるその指輪を

それから春陽は一度もはずすることはなかつた。

あいつといつか会えるのだと、自分のやのようなあの笑顔をくれた少年に

名に恥じない自分であつたとい、春陽は思い過ぎしてきた。

その結果がこの状況なのは、後悔はないが、ただ哀しかつた。

どんどんおひでいく自分の体に、春陽はうすれゆく意識の中少年の名を呼んだ。

” 紫苑 ”

一 一度目の邂逅

紫苑は自分の名を呼ぶその声を聞いた。

自分がこれまで求めてやまなかつた存在が、自分を強く呼ぶ声を。

その手を掲げ、愛しい人の名を呼ぶ。

” 春陽 ”

その瞬間頭上で光が爆発した。

ものすごい光の洪水の中、ゅうくじと少女はおりてきた。

藍色の光に包まれ、守られるように、紫苑の腕の中に春陽は下りてきた。

意識のないその体を守るように紫苑は優しく抱きしめる。

「やつと、 、 会えたね、 、 春陽。 」

その存在を確かめるように、春陽の頬を優しくなぞる。

手に伝わるぬくもりが、確かにここに存在するのだと教えてくれる。

藍色の瞳からひとすじの涙が流れた。

長い間、流れることがなかつた涙が春陽の頬をぬらした。

「隊長！…大丈夫ですか！？」

目のくらむような光の洪水がおちつくと、紫苑のもとに何人もの隊員が集まる。

自分達の知る隊長が、濡れるよつた黒髪のまだ幼さを残した顔立ちの少女を、

今まで見たことのない優しい瞳でみつめる様子に皆啞然としていた。

「お怪我はないですか隊長！？」

今のが爆発はいつたい！？、、、その少女は？」

紫苑を囲み、矢継ぎ早に隊員達が話しかける。

「ああ、、、大丈夫だ。

やつと、やつと会えたんだ。おれの”光”に。」

大事そうに、その胸に春陽の頭を抱きこみ、心底嬉しそうに紫苑は言つた。

ベルセウス帝国の東のはずれに、国境を守る都がある。

そこは付近の森からは魔物が、そして隣国からは国攻めにあつ危険な土地にあつた。

誰も決して望んではいかないその都に、紫苑はいた。

一生幽閉されるか、その都におもむくかの選択に、紫苑はこの地で生きることを選んだ。

ほとんど捨て駒として使われる兵士たちと、同じように生活し、この地で生き抜いた。

王の末子として生まれるも、その異形の目と膨大な力ゆえに恐れられ、なかば城より

追放された紫苑を、最初兵士たちは疎んでいた。

しかし、度重なる戦のなかでのその力と、決して自分達を見捨てず守り戦うその姿に、

いつしか、紫苑を中心とした軍団ができていた。

その結局は帝都の近衛隊より強く、統率されていた。

王や貴族達からは疎まれていたが、帝都の民は自分達の生活を体を張つて

守ってくれる軍団を、尊敬と恐怖の念をこめこつしかつ呼ぶようになつた。

帝国を走る、誇り高き猛者たち、
”藍色の騎士団” と。

騎士のひとつこと

突然あらわれた黒髪の少女を優しく抱きしめる隊長に、俺は度肝をぬかれた。

あんな優しそうな表情ができるのだと、思わず目をみはる。

それは俺だけでなく、まわりの騎士達も同様で、皆一人のそんな様子に

くぎ付けだった。

あらくれどもの集落、呪われた砦、地獄に一番近い場所、帝都の貴族連中や

坊ちゃん騎士達に散々に言われている自分達だったが、今は胸を張つて自分の

居場所を誇れる。

その最大の理由である彼の、彼らしからぬ様子にただただ驚くばかりであった。

そんな様子に、今となつては懐かしい記憶が思いだされる。

初めて彼、紫苑がこの砦に派遣されたとき、自分も含めて前線に赴く

騎士達はこれで自分達の運命は終わったと思っていた。

戦況は思わしくなく、疲弊した騎士達でいっぱいなのに、さうして士氣をさげるような

呪われた王子が隊長として派遣されてきたのだから。

もともと騎士といつても、平民出であつたり、なにかいわくがあつたりとやっかい

ばらいされてきたあらくれどもの集団であつたがゆえに、統率も何もあつたもので

はなかつた。

皆どうせくせつても王子様なんだから、自分達を捨て駒のようにあつかうのだろうと、

前線で指揮などとれるものかとばかにしていた。

だが、紫苑はその膨大な魔力で敵を最前線でなぎはらい、そして味方である自分達を

守つた。時には盾となり、時には癒しの魔法によつて。

それまで膨大な死傷者がでていたのに、それから一人としてかけることはなかつた。

その姿に自分達の認識は変わつていつた。

同じ死線をくぐりぬけてきたからわかる、彼の覚悟と、哀しい運命を知った。

一人、また一人と彼の指揮に従い、やがて今ひとつ騎士団としてまとまり、

この地獄と言われた階を守りきっている。

自分は紫苑の副官になり、今は忠誠を誓っている。

この地獄の数年間を一番近くでみてきた自分だからわかる、彼の心からの喜びを感じた。

人としての感情を忘れていたであるつ紫苑に、このような顔をさせる少女。

この少女は、紫苑の運命を、そして自分達の運命を変える存在なのかもしれない

漠然と騎士は思った。

目を開けると、見知らぬ天井に春陽はしばらく自分がどうしているのかわからなかつた。

しばらく呆然としていると、自分の手に重なる温もりに気づく。

自分の寝ている寝台に顔をしつぶせ眠る青年に、春陽は見覚えがあつた。

急に意識が覚醒する、自分がどういう状態であつたかを春陽は思い出した。

落ちていく意識の中、どんどん近くなる地面にたたきつけられる瞬間自分が思わず、

思い浮かべ、名を呼んだ人が目の前にいた。

そう思つた瞬間視界がどんどん潤み始めるのを感じる。

自分がどれほど会いたかったのか、このとき初めてわかつた。

早く目を開けて、その藍色の瞳をみせてほしいと思わず手を握つてしまつていた。

それに対する反応して、青年の目が開く。

それは間違いない、春陽が切望してやまなかつたあの藍色の瞳だつた。

「、、、春陽。目が覚めた？」

心底嬉しそうに目を眇め、まぶしそうに春陽を見上げるその笑顔に
春陽はなんとも

いえない気分になる。

「紫苑、、、だよね？ほんとに本物？ 夢じやない？」

不安気にそう聞く春陽に、紫苑はその手をとり、自分の頬へとあて
た。

「夢だと思つ？俺は夢なんかにしたくない。俺はここに、春陽の側
にいるよ。」

「あたたかい、、、ほんとだ。紫苑だ、、、。」

目の前の存在が本物だとわかつた瞬間、いられきれないよう春陽の
頬を涙が伝つた。

その涙を優しくぬぐいながら、紫苑も目の前にいる奇跡を感じてい
た。

この瞬間をずっと待つていたのだと、一人はそう感じずにはいられ
なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1707s/>

藍の世界

2011年10月8日17時24分発行